

よこはまユースレター

発行／公益財団法人よこはまユース
tel.045-662-3716 fax.045-662-7645
URL <https://yokohama-youth.jp/>
Eメール soumu@yokohama-youth.jp

おかげさまで設立 20 周年を迎えました

この度、よこはまユースは設立 20 周年という節目を迎えました。本号では 20 年間の歩みと、2月7日(金)に開催した『法人 20 周年記念式典』について特集します。

よこはまユース 20 年間の歩み

▶ 第 1 期 (2005 年～2010 年) ▶▶

2005 年 2 月、社団法人横浜ボランティア協会と財団法人横浜市青少年科学普及協会とが統合し、横浜市青少年育成協会が発足しました。

その後、約 10 年間、『次代を担う青少年の主体性や創造性を育み、心豊かな成長を図るため、市の施策と連携し、学校、地域、市民団体、企業などと協働して諸事業を行い、青少年の育成に寄与する』ことを目的として、青少年施設の運営や小学生から青年まで幅広い年齢の青少年を対象に事業を実施してきました。

▶ 第 2 期 (2011 年～2019 年) ▶▶

2011 年、公益財団法人への移行を機に名称を『よこはまユース』に改めました。

この頃から、行政施策は青少年の交流や健全育成を主とした従来の事業に加え、無業やひきこもりなど、困難に直面する子ども・若者たちの社会的自立を目的とした『子ども・若者支援』に広がり、法人には『健全育成と自立支援』を両輪で推進するための新しい事業展開が求められました。

その中で、寄り添い型生活支援事業、中退や進路未定などの困難を抱える高校生の支援として、大学や NPO と連携した『校内カフェ』事業などが始まりました。

2016 年には、交流センター閉館後の代替事業として、青少年の交流・活動支援スペース(さくらリビング)を桜木町ぴおシティに開設しました。

▶ 第 3 期 (2020 年～2024 年) ▶▶

コロナ禍で、様々な事業や活動の継続が困難となり、また外出自粛などで人と会って話す機会も減り、人間関係の疎遠化、孤独や孤立が深刻な問題として危惧されました。その中で、当法人は、オンラインを活用することで効果的な事業実施に取り組むとともに、青少年を育む地域や団体を活性化するため、経営方針で掲げた『つながり』をテーマに事業に取り組み、中間支援組織としての役割を果たしてきました。

また、青少年の孤立を防ぐために、企業からの助成を受けながら、高校校内カフェや移動型交流カフェの運営・実施など、若者のための居場所づくりに取り組むとともに、寄り添い型生活支援事業の事業所を 3 か所に拡大して、小・中学生の支援を行なっています。

法人設立 20 周年記念式典

2月7日(火)、崎陽軒本店において『法人設立 20 周年記念式典』を開催しました。当日は、会員や事業協力者の皆様をはじめ、行政関係者、元法人職員など計 104 人の皆様にご出席いただきました。

式典では、大向哲夫 代表理事の式辞の後、来賓を代表して山中竹春 横浜市長、高橋伸昌 公益社団法人横浜中法人会会長、野並直文 株式会社崎陽軒代表取締役会長から、ご祝辞をいただきました。



大向哲夫 代表理事



山中竹春 横浜市長

続いて、中谷忠宏 株式会社旭広告社代表取締役社長から乾杯のご発声をいただき、歓談の時間となり、各テーブルでは、青少年に関する話題やこれまでの事業の思い出など、会話に花が咲きました。途中、法人 20 年の歩みをまとめたスライドショーや、日頃から事業に参加している現役の学生ボランティアや OB・OG の方々から「よこはまユースでの活動が現在の仕事に活かしている」といった嬉しいメッセージ動画も上映されました。

その後、時間が経つのを忘れてしまうほどの盛り上がりの中、大槻繁美 業務執行理事の告辞をもって閉会となり、皆様、名残惜しそうに会場を後にされました。

多くの皆様のご支援によって、20 周年という節目を迎えることができました。次の 30 周年、40 周年に向けて、これからも職員一丸となって、未来を担う青少年のために事業を進めて参ります。今後ともご支援・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。



野並直文株式会社崎陽軒代表取締役会長より 100 万円のご寄附をいただきました。(左：大向哲夫代表理事、右：野並直文会長)

年 1 回発行している情報誌『YOKOHAMA EYE'S』の法人設立 20 周年記念号を作成しました。右の二次元コードから PDF データでご覧いただけます。



▶ 靴下で高校生を応援！『靴下キャンペーン』

校内カフェを通じて高校生たちと関わるなかで、家族のために家事やケアを頑張っていたり、アルバイト代を家計に入れて、自分の身の回りのことは後回しにしているのでは？と感じる生徒に出逢うことがあります。

そこで、高校生応援企画の第1弾として2024年9月から12月までの3か月間、靴下キャンペーンを実施し、新品の靴下を集めました。

さくらリビングや育成センターだけでなく、日頃からお世話になっている団体さんが回収箱を設置してくださったり、濱っ子寄席に持ってきてくださったり…みなさまからいただいた靴下はなんと300足。通学のときや遊びに行くときに履ける靴下や就職活動のときに必要なストッキングなど、種類豊富で色とりどりの靴下を、高校生たちは1足1足手に取り、嬉しそうに選んでいました。

みなさまからの温かいお心遣いに感謝申し上げます。



▶ 『ファシリテーションがつかめるワークショップ』開催！

1月18日(土)、育成センターにて、ビジョナリーキャリアアカデミー代表の大久保智弘さんを講師に迎え、『ファシリテーションがつかめるワークショップ』を実施しました。

他事業のアンケートで把握した質問力・聞く力を上げたい、話をうまく整理できるようになりたい…などのニーズを踏まえ、日頃の会議やミーティングを円滑に進めるためのスキルの習得を目的に開催しました。

参加者は、まず、ファシリテーションには想像力を駆使した『目的・設計の準備』と『参加者への配慮』が重要であることを講義で学び、その後、着地点をどこに置くのか、時間配分や問いかけは適切か、安心して話せる場になっているかなどに留意しながら、実践のなかで徐々にコツを掴むことができたようです。また、リフレクティングにより自分のファシリテーションを客観的に知ることで新たな発見にもつながりました。参加者からは、「漠然とした不安や心配が晴れた」「今後の活動のヒントになった」「苦手意識が減った」などの感想が寄せられました。



▶ 防災に関するノウハウを学ぶ！『のじま防災キャンプ』

野島青少年研修センターでは、コロナ禍以来中止していた『のじま防災キャンプ』を6年ぶりに開催しました。3月1日(土)から1泊2日で実施したキャンプには、32人の親子にご参加いただきました。

鎌倉を拠点に活動している『学生防災団体 Genkai(げんかい)』と連携し、団体のメンバー5人が防災に関するノウハウをこどもたちにわかりやすく丁寧に楽しく伝えてくれました。

また、宿泊施設の特性を活かした避難所づくりのワークでは、参加者全員で「どうしたらお互い気持ちよく過ごせるのか」「何を目標にしたらいいのか」などの意見を出し合いながら模擬避難所を作ることができました。

この2日間は、日頃の快適な生活環境から離れ、あえて避難所生活の不便さを体感してもらいました。非日常の環境にいきなり身を置くことで、戸惑いを感じ、実際に眠れなかった参加者もいましたが、こどもたちから元気やポジティブな力を貰いながら、みんなでキャンプを有意義なものにすることができました。



▶ 横浜の魅力を伝えます！街案内ボランティア『どこいき隊』

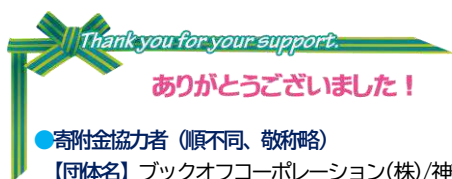
『どこいき隊』はJR桜木町駅前で行う街案内を行うボランティアです。地元の『大道芸ボランティアの会』が主催し、さくらリビングで募集した青少年も参加し一緒に活動しています。

どこいき隊のもとにやってくるのは目的地までの行き方を尋ねる人だけではありません。「おすすめの場所は？」と聞かれたり、時には海外の観光客が訪れることも。青少年たちは丁寧に相手のニーズを聞き取って対応しています。

青少年たちの参加動機は「街歩きが趣味だから」「語学力を試したい」「将来は観光業に就職したい」などさまざまです。

活動終了後の振り返りでは「相手に合わせた話し方の工夫を周りの人から学び、活かすことができた」「私は人と話すことが苦手だと思っていたが、意外と人と話すことができた」「歳が離れている人でも頑張れば伝わるのがわかり嬉しかった」といった感想がありました。

どこいき隊は2025年度も実施予定です。さくらリビングでは今後も青少年が社会とつながる体験機会を提供していきます。



●寄附金協力者(順不同、敬称略)

【団体名】ブックオフコーポレーション(株)/神奈川県食肉販売業生活衛生同業組合/(株)杉浦商事/横浜子ども会連絡協議会

【個人名】榎本文夫/尾崎正和/新庄茂/岩崎享/美藤愛/関野修一/須藤守之/野並直文/中村一雄/藤田吉隆

2024年11月1日から2025年2月28日までの寄附金

◆ユース賛助会費 11件 79,000円

◆一般寄附金 10件 1,023,143円



皆さん、ランチはどうしてますか？タイパやコスパ重視から、お弁当やコンビニ派が増えています。私は久しぶりの関内勤務、美味しいランチを求めて街を散策しています。新しい店も増え開拓しがいがありますし、かつて上司や同僚と通った懐かしの店が、コロナ禍を乗り越え今でも元気に営業しているのを見つけると、なんだかとても嬉しくなります。(oldrookie)